

農業技術情報

令和4年7月15日

池田町農業構造政策推進協議会

十勝農業改良普及センター

十勝東部支所 015-572-3128

J A 十勝池田町 572-3131

高島支所 573-2111

池田町産業振興課 572-3118

農作物の生育・作業の状況（池田町 7月15日）（ ）内は平年値、

作物名	遅速 日数	生育状況	農作業状況
秋まき小麦	+4	稈長 87.4 (75.3)cm 穂長 8.6 (9.1)cm 穂数 764 (640)本/m ²	
馬鈴しょ(メークイン)	+1	茎長 91.0 (79.0)cm 茎数 3.6 (3.5)本	
馬鈴しょ(男爵)	-	茎長 47.1 (-)cm 茎数 3.2 (-)本	
てん菜(移植)	+4	草丈 62.9 (53.5)cm 葉数 22.8 (19.7)枚 根周 26.7 (24.1)cm	
てん菜(直播)	+3	草丈 61.2 (51.0)cm 葉数 19.2 (17.9)枚 根周 19.6 (17.5)cm	
大豆	+6	草丈 44.1 (44.5)cm 葉数 6.7 (6.5)枚 開花期 7/16 (7/22)	
小豆	+1	草丈 20.5 (14.0)cm 葉数 5.2 (5.1)枚	
菜豆(金時)	+3	草丈 45.3 (32.9)cm 葉数 4.0 (3.7)枚 開花期 7/12 (7/15)	
菜豆(福勝)	-	草丈 42.5 (-)cm 葉数 4.2 (-)枚 開花期 7/14 (-)	
菜豆(手亡)	+3	草丈 31.9 (32.8)cm 葉数 6.3 (5.9)枚 開花期 7/16 (7/19)	
牧草	±0	草丈 二番草 26.9 (27.4)cm	一番収穫期 7/3(7/3)
サイレージ用 とうもろこし	+1	草丈 156.7 (149.2)cm 出葉数 13.6 (13.6)枚	
直播たまねぎ	-	草丈 83.7 (-)cm 生葉数 7.8 (-)枚 葉鞘茎 19.8 (-)mm 球径 30.8 (-)mm	

1 小麦

秋まき小麦「きたほなみ」の生育は進んでいます。今後の天候で、さらに急速に仕上がる可能性もあるので収穫準備を済ませておきましょう。

(1) 収穫前の管理

ア 収穫作業に向けて

- ①コンバインによる収穫作業がスムーズに行えるよう、ほ場周辺の枝払いや草刈りを実施しましょう。

- ②ほ場内に雑草が繁茂している場合、倒伏の助長、他ほ場への種子の持ち込み等が懸念されるため、株ごと抜き取り、ほ場外へ持ち出しましょう。
- ③倒伏した小麦は低アミロや細麦となりやすいため、品質向上のために収穫時に正常な麦と混ぜないように努めましょう。

(2) 収穫後のほ場管理

ア 麦稈の処理

- ① 収穫後の麦稈は速やかに搬出しましょう。
- ② 特に、立枯病や条斑病など土壌病害が発生したほ場では、病気のまん延を防ぐため、麦稈をすき込まずに持ち出し、堆肥化しましょう。また、2～3年は麦の作付けを避けましょう。
- ③ 麦稈をすき込む場合は、窒素流亡による環境負荷を低減するため、後作に作物や緑肥を栽培する場合を除き、窒素肥料の施用を避けましょう。

イ 多年生雑草対策

シバムギ・レッドトップ・ギシギシなど多年生雑草が多い小麦畑が散見されます。多年生雑草対策には耕起前の除草剤茎葉処理が有効です。

【多年生雑草の処理方法（グリホサート系除草剤）】

小麦収穫 → 雑草が 15cm 以上に再生 → 除草剤散布 → 耕起

※少水量散布時は専用ノズルを使用する。

※通常2～7日で効果が発現し、効果完成までさらに日数を要します。

表2 耕起前の除草剤例

農薬名	処理方法・使用時期	薬量 (ml/10a)	回数	注意事項
ラウンドアップ マックスロード	耕起前・雑草生育期 水量 25～100ℓ	200～500	3回	各薬剤共通 ・多年生雑草が 15cm 以上再生後に散布。 ・展着剤を加用しない。 ・散布後6時間は降雨がない日に散布。(ラウンドアップマックスロードは1時間、タッチダウンiQは3時間) ・周辺作物に飛散しないよう注意するとともにドリフト低減ノズルの使用が望ましい。
タッチダウン i Q	一年生イネ科雑草 耕起又は播種前 (雑草生育期)	250～500	1回	
	多年生イネ科雑草 耕起3日以前 (雑草生育期)	500～1,000		
クサトリキング	多年生イネ科雑草 耕起前まで(雑草生育期草丈 30cm以下)	250～1,000	3回	
	多年生雑草 耕起7日前まで(雑草生育期草丈 30cm以下)	500～1,000		

ウ 収穫跡地の後作緑肥作付

- ① 後作にながいも・ごぼうなどを作付けする場合は、キタネグサレセンチュウ対策のため、えん麦野生種が有効です。
- ② えん麦野生種には、ばれいしょのそうか病軽減効果や小豆落葉病の抑制効果もあります。表3を参考に、ほ場の条件に応じた緑肥を選定しましょう。

表3 小麦後作緑肥の栽培例（北海道緑肥作物等栽培指針）

緑肥作物名	は種時期	は種量 (kg/10a)	施肥量(kg/10a)			すき込み 時期
			窒素	リン酸	カリ	
えん麦（一般）	8月上～中旬	15～20	4～6	5～10	0～5	10月 中旬 ～ 10月 下旬
えん麦野生種（ハイオーツ、サイヤー）		10～20	5	5	0～5	
シロカラシ類(キカラシ)※1、2	8月上～下旬	2	5～8	5～10	0～7	
ひまわり(りん蔵) ※2	8月上～下旬	1.5～2	4～6	8～10	0～10	

※1 そうか病発生ほ場では前作として用いない。

根こぶ病発生の恐れがあるので、前作又は後作にアブラナ科野菜の作付けはしない。

※2 キタネコブセンチュウやキタネグサレセンチュウの密度を高めるので、後作物の選定に注意する。

2 ばれいしょ

雨が続き、また、茎長も長く病害が発生しやすい状況です。疫病の多発圃場も確認されています。高温多湿になると軟腐病の被害も懸念されますので、ほ場観察に基づき適正な防除を実施して下さい。

(1) 疫病の防除

表4 疫病の防除薬剤例

農薬名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	回数 (以内)	浸透移行 性の 有無	効果の 発現
リライアブル フロアブル	43 28	800～1,000	7日	3回	○	予防 治療
ホライズン DF	27 11	1,000～2,500	14日	4回	○	予防 治療
ブリザード 水和剤	27 M5	800～1,500	7日	4回	○	予防 治療
プロポーズ 顆粒水和剤	40 M5	750～1,000	7日	5回	○	予防 治療
エキナイン 顆粒水和剤	27 40	2,000～3,000	7日	4回	○	予防 治療
フロンサイドSC ※1	29	1,000～2,000	7日	4回	×	予防
マンゼブ剤	M3	400～600	7日	10回	×	予防
銅 水 和 剤	ドイツボルドーDF	M1	500	—	×	予防
	コサイド3000	M1	1,000	—	×	予防
ランマン フロアブル	21	1,000～2,000	7日	4回	●	予防
レーバス フロアブル	40	1,500～2,000	7日	2回	●	予防 治療
ライメイ フロアブル	21	2,000～3,000	7日	4回	●	予防
ゾーベック エンカンティア	49 11	2,000	14日	2回	○	予防 治療

○:浸透移行性が認められる ●:浸達性のみ認められる △:浸透移行性は認められるが強くない ×:無し
 ※1「フロンサイドSC」は1,000倍で菌核病、2,000倍で夏疫病に登録あり。花の落ちる時期に合わせて検討する。

浸透移行性とは・・・有効成分が植物の体内で移動する性質のこと。
 浸達性とは・・・有効成分が葉の表面から裏面へしみ込む性質のこと。植物体内を移動しない。

(2) 軟腐病の防除

軟腐病は高温多湿で発生が多く、過繁茂や、倒伏があると多発します。初期防除の徹底に心がけ、生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

表5 軟腐病の防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用濃度	使用時期(収穫前)	回数	浸透移行性	効果の発現
マテリーナ水和剤	31 25	1,000倍	7日	3回以内	○	予防・治療
バクテサイド水和剤	41・25 M1	750～ 1,000倍	7日	5回以内	○	予防・治療
スターナ水和剤	31	1,000倍	7日	5回以内	△	予防・治療
マスタピース水和剤	—	1,000～ 2,000倍	前日	—	×	予防
カスミンボルドー	24・M1	500～ 800倍	7日	3回以内	○	予防 治療

※オキシリニック酸(RACコード31)に対する低感受性菌が出現している地域がある。オキシリニック酸を含む剤は合計5回までとし、連用は避ける。

(3) アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの防除

特に林地、防風林近くで発生に注意し害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。

表6 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウの防除薬剤例

農薬名	RACコード	対象害虫			使用濃度	使用時期	使用回数
		アブラムシ類※	オオニジュウヤホシテントウ	ナストビハムシ			
デナポン水和剤	1A	◎(ワ)	○		1,000倍	収穫7日前	3回以内
モスピランSL液剤	4A	◎(ワ)	◎	◎	4,000倍	収穫7日前	3回以内
ゲットアウトWDG	3A	◎ (ジヤガ、モ)		◎	2,000～ 3,000倍	収穫7日前	4回以内
アクタラ顆粒水溶剤	4A	◎ (ジヤガ、ワ)	○	◎	2,000～ 3,000倍	収穫14日前	3回以内
ベジホン乳剤	1B・3A	◎ (ジヤガ、ワ)		◎	1,000～ 2,000倍	収穫30日前	2回以内
ペイオフME液剤	3A	◎ (ジヤガ、ワ)	◎	○	1,000～ 2,000倍	収穫7日前	4回以内
アドマイヤー顆粒水和剤	4A	◎ (ジヤガ、モ、ワ)	◎		5,000～ 15,000倍	収穫14日前	2回以内
モベントフロアブル	23	◎(ワ)			4,000倍	収穫7日前	3回以内
ウララDF	29	◎ (ジヤガ、モ、ワ)			2,000～ 4,000倍	収穫7日前	2回以内
コルト顆粒水和剤	9B	◎ (ジヤガ、モ、ワ)			4,000～ 6,000倍	前日	3回以内

※ジャガ：ジャガイモヒゲナガアブラムシ、モモ：モモアカアブラムシ、ワタ：ワタアブラムシ

※◎は登録があり、道ガイドに掲載されているもの、○は登録があるもの(以下、同じ)

※モメントフロアブルは銅ストマイ水和剤とは混用しない(ストレーナに付着物が生じる)。また、ストレプトマイシン含有殺菌剤との混用の場合は、モメントフロアブルを先に希釈する。

(4) 茎葉処理

ア 薬剤処理による方法

茎葉枯凋剤の散布は塊茎が目標の大きさに達した時期に晴天無風の日を選んで散布してください。

表7 茎葉枯凋処理剤

農薬名	使用量(mℓ /10a)	水量(ℓ /10a)	使用時期	使用回数(以内)
デシカン乳剤	250～450	100	茎葉黄変始～収穫3日前まで	2回

※接触剤のため茎葉にまんべんなく薬剤を付着させる。

※茎葉黄変期前に使用した場合、枯凋が不完全になる場合がある。

※処理後2～3時間以内に、降雨が予想される場合には使用を避ける。

※生理的ストレスにより維管束褐変を生じやすいので、土壌が極端に乾燥しているときは使用を避ける。

※散布の際にはドリフトを起こさないように注意。

イ リーフチョッパーを使用する場合

①茎葉処理作業は茎葉黄変期後の好天時に作業する。

②塊茎の損傷や緑化防止のため、刈取り高さは培土を崩さないよう地表から余裕をもたせて処理する。

③後部に石れきが飛散しやすく危険なので、周囲に人がいないことを確認後処理する。

3 豆 類

豆類全般的に生育、開花が進んでいます。管理作業や病害虫防除のタイミングが遅れないように注意しましょう。

(1) 大豆のべと病防除

「いわいくろ」以外の品種はべと病抵抗性があるので防除は不要です。

開花始に上位葉(上から見る事ができる葉)を確認し、適正に防除をしましょう。

①黒大豆の防除

開花2～3週間前に要防除水準(病斑個数30個/葉 葉全面に病斑がみられる)に達した場合→要防除水準に達した時期とその2～3週間後の2回防除。

開花始に要防除水準に達していない場合→開花期1回防除が必要

表8 大豆べと病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	使用回数(以内)
プロポーズ顆粒水和剤	40・M5	1,000	21日	2回
フェスティバルC水和剤	40・M1	600	7日	3回

(2) 大豆の菌核病防除

開花始後 10～15 日目に第 1 回散布をし、2 回目以降は発生状況に応じて 10 日毎に防除しましょう。

表 9 大豆菌核病の防除薬剤例

薬剤名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	備考
トップジンM水和剤	1	700～1,000	14 日	4 回	
ファンタジスタ顆粒 水和剤	11	2,000	7 日	3 回	紫斑病に 3000 倍 で登録あり

(3) 小豆・菜豆の病害虫防除

ア 炭そ病の防除（小豆）

7 月からの多雨・多湿時にでやすく、すでに発生が確認されています。開花始後の防除まで日数がある場合は、トップジンMによる防除を実施しましょう（表 10）。

イ 菌核病、灰色かび病の防除（小豆・菜豆）

開花後に曇雨天が続くと発病しやすくなります。ほ場の生育に合わせて、適期防除に努めてください。

◎ 小豆防除適期

1 回目：開花始後 7～10 日目

2 回目：1 回目防除の 10 日後

◎ 菜豆防除適期

1 回目：開花始後 5～7 日目

2 回目：1 回目防除の 10 日後

表 10 小豆・菜豆 菌核病、灰色かび病を中心とした防除薬剤

薬剤名	RAC コード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	炭そ病 (倍)
ブロードワン 顆粒水和剤※1	1・9	1,000	14 日	4 回	○
ブライア 水和剤	10・9	1,000	14 日	4 回	○
ファンタジスタ 顆粒水和剤	11	2,000	7 日	3 回	○
フロンサイド SC	29	1,000	【小豆】21 日 【菜豆】7 日	3 回	1,000～2,000
オルフィン フロアブル	7	2,000	7 日	3 回	—
トップジンM 水和剤※1	1	菌核病 700～1,000 輪紋病 1,000※2	【小豆】14 日 【菜豆】7 日	4 回	【小豆】 1,000 【菜豆】 700～1,000

※1 ブロードワン顆粒水和剤、トップジンM水和剤はチオファネートメチルを含むので、総使用回数は、は種後 4 回以内です。

※2 菜豆には登録無し

ウ アブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除（小豆）

マメアブラムシの発生が確認されています。発生状況に応じて防除してください。アズキノメイガは開花始の 7～10 日後に薬剤散布を行ってください。

表 11 小豆のアブラムシ類・アズキノメイガ・ダニ防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)	アブラ ムシ 類	アズキ ノ メイガ	ナミ ハ ダ ニ	カ メ ム シ
モスピランSL液剤	4A	2,000～ 4,000	14日	3回	○	○ 2,000倍		
ゲットアウトWDG	3A	3,000	7日	3回	○	○		
ペイオフME液剤	3A	2,000	7日	3回	○	○		
スミチオン乳剤	1B	1,000	21日	4回	○	○		○
フェニックス顆粒 水和剤	28	4,000	7日	2回		○		
ウララDF	29	4,000	7日	2回	○			
ダニトロンフロアブ ル	21A	1,000	7日	1回			○	

4 てんさい

生育は平年より3～4日進んでいます。褐斑病の初発、ヨトウガの食害が確認されています。ほ場を良く観察し病害虫の発生に応じた適期防除に努めてください。

(1) 褐斑病の防除

褐斑病は前年隣接ほ場で罹病残渣をすき込んだ場合、初発が早まり被害が広がる恐れがあります。ほ場の発病状況を確認し発生初期には遅れずに防除します。

また、DMI剤（RACコード 3）およびカスガマイシン剤（RACコード 24）は道内で広く耐性菌の発生が確認されています。可能な限り使用回数を低減してください。また、DMI剤はマンゼブ剤（RACコード M3）と同時に使用しましょう。

表12 褐斑病防除例

薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	浸透 移行性	薬剤 特性	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
グリーンダイセンM 水和剤	M3	500	×	予	21日	5回
ホクガード乳剤	3	1,000～ 1,500	○	予治	14日	2回
どさんコスター水和剤	3・M3	500	○	予治	21日	4回
カスミンボルドー	24・M1	800～ 1,000	○	予治	7日	5回

* マンゼブ（RACコード M3）を含む剤の総使用回数は5回まで。

(2) アブラムシ類・ヨトウガの防除

RACコード別系統剤による輪番防除を実施し、連用とならないよう予防防除を実施しましょう。また8月中旬以降の発生状況により薬剤処理回数の削減を検討しましょう。

ヨトウガは幼虫が大きくなるにつれて薬剤の効果が低減しますので、食害を確認したら速やかに防除しましょう。

表 1 3 ヨトウガ防除例

薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
オルトラン水和剤	1B	1,000~1,500	45日	3回
トクチオン乳剤	1B	1,000~1,500	30日	2回
カスケード乳剤	15	4,000	7日	4回
マッチ乳剤	15	3,000	14日	2回
ベジホン乳剤	1B・3A	1,000~2,000	21日	4回
ゲットアウトWDG	3A	2,000~3,000	14日	4回
ペイオフME液剤	3A	1,000~2,000	14日	4回

表 1 4 アブラムシの防除薬剤例

農薬名	RACコード	使用濃度(倍)	使用時期(収穫前)	回数(以内)
リーズン顆粒水和剤	4A・15	3,000	14日	2回
ダントツ水溶剤	4A	2,000~4,000	14日	3回
アクタラ顆粒水溶剤	4A	3,000	7日	3回
モスピランSL液剤	4A	4,000	3日	3回

(3) 葉腐病の防除

葉腐病は高温多湿条件で多発します。発生が見られたら直ちに防除を行ってください。

表 1 5 葉腐病の防除薬剤例

薬剤名	RACコード	使用濃度 (倍)	使用時期 (収穫前)	使用回数 (以内)
モンセレン顆粒水和剤	20	1,000	30日前	4回※
リンバー顆粒水和剤	7	4,000	7日前	3回
モンカットフロアブル 40	7	1,000	14日前	4回

※育苗中を含む。